議員県外研修リポート

被災地の3年後を訪ねて

平成26年5月13日から15日の3日間の日程で「東日本の被災地に学ぶ」ことを目的に岩手県陸前高田市、宮城県の気仙沼市・南三陸町・石巻市・女川町・塩釜市・東松島市・仙台市・名取市の7市・2町の視察研修を行いました。黒潮町議会として被災地を訪れるのは2度目になります。

総務常任委員長
森　治史（もり　はるし）

陸前高田市の気仙大工左官伝承館（海抜150m）の語り部さんの体験によると、当日の地震はいつもより強く、特に2度目の揺れは大きく、それは走行中のダンプカーの荷台の上にいる感じであった。

目の前の広見湾の海水が一気に引き、津波は第2波が大きく14m以上の高さとなり、白い土煙を上げ市内全域を飲み込み1800名もの尊い生命を奪っていった。

車で出かける時は災害発生時にすぐ出られるように駐車をしておくこと。

家族で災害時の連絡について話し合うことと、遠くの親類を連絡網に入れ、災害時に1番先に連絡を取る。

津波が来た時はそれぞれで避難する。

高い津波を見ると動けなくなるので、海を見ずに高台に向け避難する事を子どもに話して聞かす。

津波で家と蔵を失った70歳代の男性の話によると、「当日、近くの高台に向け多くの人が車で避難し登って行ったが、駐車する広場が無く渋滞になったことで多くの方が犠牲となった。そのことを考えると、車を利用して避難可能な道路を高台に通じるように造り、100台ぐらい駐車できる広場を設けることで犠牲を防げる。」と話された。

体験者の貴重な話をこれからの町の防災計画に活かしていけると感じました。

－ 伝承館内にて語り部さんより話を伺う －
この建物にはクギは使用してないが、特段の被害がなく、震災後の避難場所として使われ、語り部さんも2週間ほど被災者をお世話をされたとのこと

教育厚生常任委員長
西村　將伸（にしむら　まさのぶ）

被災直後の現場を見学した3年前とは違い、今回の視察は地元住民（語り部）の方や産業再生に立ち向かう方達と直に向き合い、被災した時の体験談や復興に係わるさまざまな課題を聴講することができました。

震災の体験談として、陸前高田市では、津波によって自宅や職場を流出し、家族の命を奪われてしまった人と、職場や自宅が高台にあったことで家族全員が無事であった人、両者の境遇の違いで、言いようもない心の葛藤が生まれた話にはショックを受けました。

東松島市の「震災の語り部」として後世に伝える道を選んだ（元）民宿経営者の体験話は、失われてしまった自宅（民宿）や集落、町の痕跡を案内しながら、そこにあった自らの生活をたぐり寄せているようで、胸に迫るものがありました。

復興状況で目立つのは、将来の大津波に備えて、ほとんどの被災地が町の中心部を盛り土よる地盤のかさ上げと、切土による団地造成に急ピッチで取り組んでいることです。

しかしながら震災後の人口流出が激しく、人口減少をとどめることが新たな課題になっています。

また、産業再生に力を注ぐ気仙沼市と女川町では、国の